



Oscar Wilde by Napoleon Sarony, 1882 — National Portrait Gallery, London

ワイルドの世紀末

井村 君江

世紀末に対する見方として、否定的と肯定的の二つが生まれてくるのは自明のことである。すなわち、世紀末を既成のものが衰退し崩壊していく末期的現象として「退廃過程」とする見方と、逆の立場から、新しいものが成生し、形づくられていく「形成過程」の混頓とした過渡期の現象とする見方とである。

明治大正時代の知識人たちが持っていた世紀末観を規定したのは、否定的見方をとるユダヤ人医師 Max Nordau の *Entartung* (1893) と、肯定的立場をとる Holbrook Jackson の *The Eighteen Nineties* (1913) の二つであった。Nordau の英訳 *Degeneration* は明治28年に出版されたが、これは精神病理学をバックに世紀末を混頓とした時代、暗澹たる落莫と苦悩と宿命的な厭世気分が漲った時代として批判したもので、その典型的作家の一人としてワイルドが引き合いに出されている。自然を軽蔑し、背徳、犯罪を讃美した頹廢の自己偏執狂であるとする解釈である。こうした Nordau の批判的世紀末観、エゴ・マニアの典型とするワイルド観がそのまま日本へ輸入され、明治大正の文壇の主説となったのであった。

明治36年の『帝国文学』(9巻5号)に、「無書子」の筆名で安藤勝一郎の「アカダン論」が掲載されたが、これが明治期に於けるわが国評論家の最も早い世紀末論であり、ワイルドへの言及である。しかしこの論は Nordau の説を下敷にしたものであり、こうしたことはワイルドを自我意識の強い作家で、「自然を忘却」し、「自己崇拜に陥れる我利我利主義」と言っているところにもうかがえる。大正時代に Jackson の肯定的見方が入るまで、日本の文壇ではこうした否定的見方が主として行われていたが、Nordau の科学的合理的な立場から文学を割り切り、ワイルドを非社会的無謀とか、病理的錯乱とか、虚栄本能の邪道とかする解釈も、見方を変えれば天才という異常な才能を、裏側から実証したことに他ならない。

Arthur Symons は *The Symbolist Movement in Literature* (1899) の中で、今世紀末を象徴する人物四人を掲げているが、心理学の Sigmund Freud (1856—1936)、哲学の Friedrich Nietzsche (1844—1900)、経済の Karl Marx (1818—1883)、そして、文学者としてはワイルドが選ばれている。ワイルドに象徴される1890年代の諸傾向を集約的に掲げてみると、

次の七項目になると私には思われる。

(1) Decadance—頹廢, 倦怠, アンニュイ (無為) (以下カッコ内は否定的意味)

完成されたものが崩れ、衰微していく残光の美を愛し、それを積極的に詩文に定着させていったのはフランスの作家たちであった。Huysmans に至ってデカダンスは、「恣蕩靡爛の極に達したり」と言われるが、主人公の一人 Desessant は、現実を避け、人工の世界が創る美とアンニュイに浸ったが、これはワイルドの Dorian や、Salome が住む世界と共通した次元の世界である。

(2) Artificiality—人工性, 都会趣味, 想像 (自然軽蔑)

ロンドンとパリを愛する都会主義もここに入る。W.B.Yeats は、*The Tragic Generation* (1922) で、Symons, Dowson, Joyce, Beardsley, Wilde 等が、デュエップの街で語り合ったり、フランスの作家 Gide や Schwob, Louÿs 達とパリのカフェで芸術論を交しているという英米文学者たちの親しい交友を描いている。当時の二都市は、人工と虚構の美が溢れた新しい芸術の温床であった。「人生が芸術を模倣するのであり、芸術が人生を模倣するのではない。」とし、ロンドンの雨をホイスラーの絵に見、写楽に日本人を見るワイルドにとって、虚構、人工、想像の世界に真実が見えていたのである。

(3) Aestheticism—審美・耽美主義, 美的生活 (華美)

美的生活を実行に移せばワイルドの Aesthetic Costume となる。ある時はネロカットに、メロヴィンジャンスタイルとボヘミアンネクタイ、ひまわりの花を手にソーホー通りを遊歩したと言われる。服装による個性の表現であり、ダンディズムにつながってゆく。過剰な美への耽溺。これは、道徳主義で固まったシルクハットのヴィクトリア朝社会への一つの挑戦とも見られよう。

(4) Individualism—個人主義, 個性的 (自己顕示)

Cult du moi (自己崇拜) としてフランスでもこの時代は芸術家が自己中心、自己顕示を芸術の中ばかりでなく、現実においても示した時代であった。「自分の talent は芸術に、genius は生活に注ぎ込んだ」というワイルドにとって、ヴィクトリア朝は、自己を表現する意味のある時代であった。すなわち、人々が安定した社会規約の中で、目立たずに墮眠



をむさぼっていた時代だったからである。

(5) Dandism—ダンディ装飾, 仮面 (偽善)

「Dandy なる語はもとより英語であり、かの霧と憂鬱 (スプリーン) とブランディの国、冷血と尊大と自己統制の国民の一つの理想を示す語である」と『ボオドレエル研究』の中で言う齊藤磯雄先生の言葉は、イギリスのダンディの定義として十分であろう。ダンディとは眼に見える身のこなしや、服装を言うのではなく、生活態度そのものなのである。「ダンディは鏡の前で生き、かつ眠らなければならぬ」(Baudelaire 『赤裸の心』)。Bunburyism をそのまま生活した Earnest にも、逮捕者の前で、超然とした態度を崩さなかったワイルドにも、ダンディズムは見られる。

(6) Mystification—神秘的魅力, 韜晦趣味 (曖昧性)

韜晦趣味は、ダンディズムの外側に巡らされた城壁である。これによって俗悪な社会から隔絶し、自己の不羈独立を守る。これは二を表現し八を隠す表現ともなり、*Sphinx with Secret* の魅力ともなる。そして次の象徴へとつながっていく。

(7) Aesthetic Platonism—象徴・イメージ・美的理想 (空想)

イメージを尊重し象徴を重んじ、一つの美的理想を描くという Baudelaire で言えば、le beau ideal への志向である。あるものがあるがままに現実の次元で描くのではなく、あるがままでない世界、一つの象徴世界に昇華させて描く。幸福な王子も、Dorian も、Salome もそして Earnest も、現実に生きる人間のある面の象徴と言えよう。彼らは現実存在しないからこそ、永遠の実在性を持っている。

こうした世紀末の諸傾向を、ワイルドは表現し生活した。「態度の人」と言われるような距離において、ヴィクトリア朝の既成道徳に反発し、芸術という異次元の世界の中に住み、現実を冷静に客観視して批判の筆で表現した。シニミズム、アフォリズム、逆説、そして機知と諧謔にとんだものの方と表現には、新しい次の時代への騎手たる資格が十分に認められる。ワイルドは単なる世紀末の申し子だったのであろうか。二十世紀末のいま、それは問われるべきである。
(明星大学教授)